

の者逆叛 記手獄牢

は失てけかに頭初和昭らか葉末正大
記手獄牢の者義主府政無が我るたれ

所行發
部版出者動行
MCMXXVIII

閃 光

(昭和三年二月平凡社発行「新興文学」2所載)

暗いヤミの壁がおれたちの前をふさいでいる
身をもって壁にぶつかって行った友は

閃光をのこしてヤミにのまれて行った

一人、二人、三人……五人……十人……

ヤミは吸盤をもっておれたちの同志を吸いこんだ

光は幾度かきらめいては消えた

ヤミは暗さを増して行った

重苦しい血の歌はおれたちの胸にうなっている

せん光を共に消えた友の最後の絶叫はおれたちの胸にある!

(和田久太郎君の追悼会の日) 岡本 潤



1923年（大正12年）9月16日陸軍の魔手に虐殺された
大杉 栄、妻 野枝、オイ 宗一ちゃん
ウチカキ

編輯者緒言

大正の末葉から昭和の初頭にかけて、我が無政府主義運動の犠牲者として十二の生命を失ひました。或る者は官憲の手で殺害され、或る者は刑死し、或る者は獄裡に自殺を遂げ、また或る者は終身囚としてその長い生涯を獄底に閉じられてゐますが、如何せん、吾々は彼等の處罰された刑の量定に就いて、またその善惡是非に就いて一言をさしはさむ自由をも許されない事云ふまでもありません。従つて此の小文集も、彼等の無政府主義思想を物語るに足るものを集める事は之れをさげ、主として、（大杉夫妻は例外）各自の性格の一面を語る、そして能ふ限り藝術的價値の豊かなものを選びました。

配列の順序は、已に故人になつた人々は、その死亡の順次、無期在監中の人々はその下獄の順次に據りました。この小文集に加ふべくして加へ得なかつたのは、久板卯之助、根岸正吉兩君のそれでありませう。久板君は熱情に富んだ、然し溫和な典型的アナキスト、根岸君は『N正吉』の名で知られるアナキストの叛逆詩人でありました。前者は老後の病軀を畫家として過さんとして、天城山に寫生旅行して、大正十一年の、初め同山頂猫間峠寒椿の下で凍死を遂げ、後者は肺患におかされて横濱の施料病院で死亡いたしました。この小文集を編むに當つても泪と共に想起せざる能はざる人々であります。

なほ此の小文集の出版が早急の思ひつきであつた爲めに、それ／＼了解を求む可くして爲し得なかつた事を各自の生前所屬した團體に謝します。

一九二八年五月

『行動者』同人

一	高尾平兵衛	(獄中消息)	三
二	大杉榮	(研究)	五
三	伊藤野枝	(研究)	三
四	後藤謙太郎	(詩)	二六
五	村木源次郎	(詩)	三
六	古田大次郎	(詩感想)	二六
七	中濱鐵	(詩)	四〇
八	金子文子	(歌)	四四
九	和田久太郎	(俳句)	四六
一〇	小西次郎	(獄中消息)	五一
一一	河合康左	(獄中消息)	五五
一二	朴烈	(獄中消息)	五三

一、高尾平兵衛

——獄中消息——

高尾君はもと大杉系と目された人、大杉君が共産系の高津正道、近藤榮藏等と共に週刊『労働運動』を始めるや、その態度を非とし、純正アナキズムを主張し、理論家、指導者を排撃して、吉田一等と共に『労働者』を出して論陣をばった。

が、如何なるわけか、吉田と共に最初の入露を計つて成功し、歸來、ホルセグアイキとの共同戦線を主張して『戦線同盟』を作つたが、甚だ振はず、赤化防止團々長米村嘉十郎を襲つて射殺された。終焉に至るまで『労働者』當時の精神を持つてゐたかどうかは分らないが、熱のある立派な闘士ではあつた。

▽獄舎から

——近頃の別荘の氣持は又格別です。我々の別荘は春に限ります。馴致の力、人間の順應性、實に之れは恐ろしいものです。去年の夏彼の東京監獄の一月月餘りと云ふものは實に苦しい體驗の一つでした。然るに今は何と云ふこととせう。その苦しみを感

じないのです——實際監獄で生れ監獄で育つた人間は、その監獄が社會であつて社會は斯ういふものだと思つて、其の鐵鎖を斷ち切らうとはしないでせう——我々が昔自由民であつた時代から彼の權力の鐵鎖に縛られた幾時代を過ぐる間に、人間は彼の往昔の自由を失つて、牢獄的國家組織の下に囚人として黙々と働いて來た我々の祖先は、何たる不幸な人間でしてせう。然し之れは皆此の順應性の致すところとせう。革命の困難な所以も實に此處にあるとせう。——我々は覺めた、今、この權力に服従する順應性から、權力を恐れない順應性に導かねばならないのです。然し之の服従すること、恐れない事は實に一步の差であつて、又數百歩の差です——近頃の目覺めたる青年は、大がき權力に恐れない反抗性を監獄で養つて歸ります。實に監獄は反逆思想の養成所であり、又革命の温床です。

私は、諸君にお願ひする、決して若き青年の血氣を止むる勿れと。眞の闘士は決して困苦に屈しない。苦難は益々眞・勇者をして強からしむる——我々には未だ犠牲の拂ひやうが少くない。革命は犠牲なしには到底購はれない——さようなら。大正十年四月二十三日

二、大杉 榮 — 研究 —

大杉君は 國の丸龜で生れ、外國語學校卒業後、社會運動に身を投じ、最初は幸徳君等の『平民新聞』を手傳ひ、死ぬる迄には前科六犯になつてゐた。大逆事件以後は、『近代思想』『平民新聞』『文明批評』『労働新聞』『労働運動』等を續刊し、これを主宰した。

マルクス主義に對してはサンチカリズムを以て戦ひ、労働總同盟に對しては自由聯合主義によつて抗争し、上海に航して國際的聯絡の端緒を造り、フランスを経てドイツの國際無政府主義大會に出席せんとして果さず。大正十二年九月十六日、東京憲兵隊の一室に於て、甘粕憲兵大尉外數名の手にあつて、伊藤野枝、橋宗一両君と共に殺された。

著書としては『生の闘争』『社會的 人主義』『労働運動の哲學』『クロボトキン研究』『正義を求むる心』『無政府主義者の見たロシア革命』『自由の先驅』『日本脱出記』自傳、等があり、譯著としては『種の起原』『男女關係の進化』『人間の正體』『昆虫記』『一革命家の思出』『相互扶助論』等がある。以上何れも『大杉榮全集』全十卷に納められ、これに漏れたものは、『大杉榮隨筆集』（安成二郎編）『大杉榮遺稿』（安谷寛一編）となつて出てゐる。

▽個人的思索

何學問でもさうだが、其の最初からの研究方法を教へずに、ちやんと出来上がった學説を眞最初から覺へこますのが、今日の學校教育である。だから其の研究方法与云へば、學ぶべき學説の順序正しき排列である、参考書の羅列である。なるべく自分で頭を使はずに、しかも無駄のないやうに、多くの書物を讀む事である。

従つて今日の學者の書物は、總て極めて解り易く書かれてある。讀んでさへ行けば、大して考へずとも、又大した疑ひも挾まずに、ひとりでに合點の行くやうに書かれてある。これは一寸見には甚だ結構な事のやうにも思はれるが、しかし其の實際をよくよく考へて見れば、甚だ怪しからぬ事なのである。即ち斯くの如き書物の書き方は、教育を官營する國家にとつて、次ぎの如き二重の利益がある。先づ第一には將來國家の爲に有用な人物となるべき生徒に、短かい時間にいゝろゝなる事を覺へこませる事が出来る。そして第二には、國家の爲には常に有害な個人的思索の能力を、早くから減殺させて了ふ事が出来る。

此の個人的思索の能力を發達さすと云ふ事が、實を云へば、教育の本當の目的でなければならぬのだ。又、一切の學問の研究方法与云ふのも、其處に基づかなければならぬのだ。けれども各個人の此の能力の發達は、今日の組織の國家や社會にとつては、其の存亡に關する由々しき一大事である。各個人は只だ、國家の教へる通りを、其のまゝに覺へこんでゐなければいけないのだ。殊に政治學とか、法律學とか、經濟學とか、史學とかの社會科學に於ては、國家の教へる範圍以外に、決して個人的思索を許さない。

そこで此の社會科學の範圍内に於ける本當の研究は、何よりも先づ、政府的思想による一切の學者と書籍とを斥けて、自らの眼を以て社會的事物を觀察し、自分の頭を以つて之れを判斷し得る力を造る事にしなければならぬ。

二

僕はよく、讀者諸君から、社會主義や無政府主義や、又は廣く社會問題の研究をするのに、どんな書物をどんな順序で讀めばいいか、と云ふ質問を受ける。そして又、多くの人々から、日本文で書かれた書物の甚だ乏しい事に就いて屢々訴へられる。前者の質問は外國語を讀み得る、極めて少數の人の要求である。しかし後者の訴へは、殆んど總ての讀者諸君に共通する、一般の要求であらうと思ふ。そこで先づ此の後者の人々に向つて、社會問題研究法の大體を説かうと思ふ。

僕は先づ、何よりも先きに、讀者の身邊の事實によつて、諸君の研究を始められん事を望む。小さな小さな事實でもいゝ。或は小さい程、其の研究が便宜であり、且つ有効であらうとも思ふ。又如何に小さな事實と雖も、其の關係する範圍は極めて廣い。本誌に僕等の生活の一欄を設けて讀者諸君の寄書を募つてゐるのも、要するに此の研究の奨励に過ぎない。讀者諸君が、若し日記の形式によつて、日々身邊に起る一小事業の觀察と、其れに對する感想と批評とを蒐集して行くならば、其の日記は社會問題研究の貴重な好材料となるに違ひない。

又、事は少しく大きくなるが、地方にある數多の友人に、此頃僕の勸告し且つ依頼した、甚だ興味深い社會問題研究方法がある。それは村の歴史、殊に經濟史を作る事だ。一村でなくても其中の一大字だけでもいゝ。或は一農家だけに就いてゝもいゝ。

先づ諸君自ら、諸君の村の個々の家の現在に於ける經濟狀態を調査して、其の詳細の統計表を作つて見る。譬へば、大地主、中地主、小地主、自分自分の田畑を耕す農夫、他人の田畑を耕す小作人と云ふやうに。そして更に十年以前の其の統計表を作つて、それと今日のそれとを比較して見る。其處には、必ず、何等かの差を見出すに違ひない。次に、其の差の一つ一つに就いて出来るだけ詳細に其の原因を調べて見る。斯くして諸君は、地主と農夫と小作人との關係に就いて諸君自らの確固たる觀察と考察とを爲し得る事になる。又、農業と工業、農業と商業、農家と

高利貸、農家と租税、其他種々なる興味深い關係が、おのづから諸君の前に展開して来る。

斯くして諸君は、單なる一村落の十年、二十年、三十年、四十年、若くは五十年間の歴史を調べて見るだけで、殆んど社會問題の全部に觸れる事が出来る。そして其等の有らゆる問題に對して、諸君自らの觀察と考察とによる諸君自らの斷乎たる判斷を下す事が出来るやうになる。

三

これは農村に就いての一例に過ぎないが、其他何事にもあれ、諸君の興味をひいた一社會的事實に就いて、其の事實の内容の詳細と、それに關聯する諸事業とを、それからそれへと調査して行くだけでも、優に五冊や十冊の書物を読むよりも、有益な且つ確實な社會的知識が得られる。且つ斯くして始めて、自己の個人的思索の能力を本當に發達させて行く事が出来る。

いゝ、加減な嘘つばちを、馬鹿でも金さへあれば入れる大學の學生等に讀ますやうに、いかにも本當らしく巧みに書き上げた、社會學や、政治學や、法律學や、經濟學の書物などは、其の嘘つき具合を研究する外には何の用もないのだ。又、政府的思想から脱けた自由主義の學者や、社會主義者や、無政府主義者の書物を讀むにしても、只だ僕等の個人的思索を進める補助にさへ役に立てればいゝのだ。

研究や思索は遊戲ではない。僕等は僕等の日々の生活に於て、必ず何事かを考へ、又其の考へ

を飽くまでも進ませて行かなければならぬ或る要求に當面する。さうしても放つては置けない何等かの事實にぶつ、かる。僕等の思索や研究は、此の事實に對する、僕等自身の己むに己まれぬ内的要求であるのだ。僕等は、僕等自身の此の内的要求を、何よりも先づ他人の著書によつて、即ち他人の觀察と、他人の實驗と他人の判斷とによつて、満足さすと云ふやうな怠け者であつてはいけない。よし既に受け入れてゐる或る判斷があつた所で、更に自分の觀察と實驗とによつて再び判斷し正さなければいけない。本當に自ら刻苦して、骨身にまでも徹する、僕等自身の判斷を造り上げて行かなければいけない。

此の個人的思索の成就があつて、始めて吾々は自由なる人間となるのだ。いかに自由主義をふり廻した所で、其の自由主義其者が他人の判斷から借りて來たものであれば、其の人は或はマルクスの、或はクロボトキンの、思想上の奴隷である。社會運動は、一種の宗教的狂熱を伴ふと共に、兎角に斯くの如き奴隷を製造したがるものである。僕等は、如何なる場合にあつても、奴隷であつてはならない。

書物を読んでゐない事を以て無學であると自卑するが如き風習は、僕等の中から全く一掃し去らなければいけない。僕等は、他人のいろ／＼な判斷を机の上に並べ立て、一種の論理的遊戲を以て、其れをさまざまに混交し排列する、所謂學者の眞似をする要はない。寧ろ斯くの如き方

法を侮蔑し排斥して、始めて個人的思索の端緒に就く事が出来るのだ。

書物を読むよりも先づ、自分の身邊の生きてゐる事實に眼を轉ぜよ。そして其の事實に對して徒らに頭の中で理窟をこね廻はさず、只だ其の有りのまゝを注視せよ。其の事實其者に對しては飽くまでも深く、又その事實と關聯する諸事實に對しては飽くまでも廣く、出来るだけの觀察と調査とを遂げよ。又必要の場合には、此の必要な甚だ屢々起る事であるが、自ら其の事實の中に身を投じて見よ。即ち自ら自分を實驗に供して見よ。斯くの如き觀察と實驗との度重なるに従つて、始めて僕等は、僕等自身の、動かすべからざる思想を築き上げて行くのだ。

此の個人的思索を欲しない輩は、所謂衆愚である、永遠の奴隷である。歴史を創る事なくして歴史に引きづられて行く、有象無象である。僕等とは全くの他人である。